
『言霊袋』 —さがしもの—

樗 みのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『言霊袋』 ―さがしもの―

【Nコード】

N2893H

【作者名】

樗 みのり

【あらすじ】

日曜早朝の公園。パジャマ姿の男が一人、ごそごそと何やら「さがしもの」をしています。公園に集っていた人々は、協力をして男の手伝いをします。果たして、「さがしもの」は見つかったのですか……。

『言霊袋』

日曜早朝の公園。

パジャマ姿の男が、茂みの中をこそごととかきまわしている。胸元まで茂みに突っ込み、尻だけ出した姿で、しばらく、こそごとこそとすると、男は道をたどり始めた。

田植えでもするように、腰を屈め、口ではぶつぶつ何かを言いながら、あたりを窺いつつ、ゆるゆると進んでいく。

「なにか、探し物ですか？」

犬の散歩中の老人が、男に声をかけた。

男は思わぬ声に驚き、ぜんまいが巻き戻るように、ぴんっと腰を伸ばし、老人に斜め三十五度くらいに向き合った。

昨晩はうつ伏せで眠っていたらしく、男の伸びた前髪は右に流れるように、中途半端な形で立ってる。

「先ほどから見ておりましたら、何やら、かなり必死なご様子。

この辺りで何か落とされたのですかな？ それとも、犬か猫かをお探しですか？」

男は、視線を右に下に左にと、落ち着きなく動かしした後、はあ、と大きく息をついて、ぽつんと言った。だらりと垂らした手には、紫色の巾着袋が握られている。

「言葉、なんです」

老人は、思いもよらぬ男の返答に目を丸くした。空いた手でひとつ咳払いをすると、男のつま先から頭まで見て、問い直した。

「言葉、ですか？」

「はい、言葉、です」

頬がこけた顔色の悪い男は、やはり視線を右下左と彷徨わせながら、言葉を続けた。

「正確に、言うと、言葉を入れた、封筒なんです。　ぼくは、そのマンシヨンの、四階に、住んでいて……」

老人は、抱えて歩く方が早いであろう犬を足下に引き寄せると、男の顔を覗きこみ、驚き言った。

「おや、これは奇遇ですな。　私はその向かいの家に住んでいるんですよ。　あのマンシヨンの方は、よくお見かけするので、たいてい知っていると思っていましたが、失礼ながら、あなたのことは存じ上げませんでした」

男は胃の辺りをしきりに摩りながら、今にも消えてしまいそうな不明瞭な言葉で語った。

「越してきたのは、半年前で。　毎晩、帰りは深夜、ですし、朝も、ぎりぎりまで寝て、走ってますので」

「それはご苦勞なことですな。　それで、その言葉は、昨日の帰りに、ここで落とされたと？」

男は朝だというのに、深夜のようなため息を吐いて、ぼつぼつと続けた。

「いえ、普段は、自宅の引き出しに、しまつてあるんです。この袋に入れて。昨日、色々ありまして、やはりその言葉を、しまつておくのはやめよう、と思ひまして。残業で遅くなつて、疲れていたんです。封を開けるのは、今日にしよう、と思つていたんですが、氣になつて。以前にも何回か、この言葉、逃げ出したことがあつて。だから、寝る前に、ちゃんと入つてゐるか、確認したんです。ちゃんとゐるつて確認したら、安心して、寝てしまつて……。今朝、目が覚めた時には、いなくなつていたんです。袋の紐をきちんと結んでいなかったのが、いけなかつたんです。前逃げ出した時は、部屋の中で、捕まえられたんです。でも今日は、部屋中探してもいなくて。窓を開けっ放しにして寝ていたから、きっと窓から外に逃げたんです。明日は、明日こそ、もう、使つてしまおうと、思つていたのに……」

話しているうちに氣持ちが昂ぶつたのか、男は泣き崩れるように、頭を抱えその場に座り込んだ。

老人は、その姿があまりにも痛々しかつたので、男に「私も一緒に探しましょう」と提案をした。

男は一瞬迷つたそぶりを見せたが、背に腹はかえられなかつたのか、「よろしくお願いします」と、丁寧に頭を下げた。

男が言うには、言葉を入れた袋というのは、ハガキ大の黒色の封筒であるという。糊でしっかり封をしてあるので、口は開かないようになつており、中身だけが出る心配は、雨でも降つて濡れない限りない、のだという。

公園には、老人の他にも、朝のジョギングなどの運動をしに来ている人が多くいた。

老人は、それらの多くの人々と顔見知りらしく、声をかけ、男の探し物の手伝いを頼んだ。

男は、大勢の人々に協力を求めることに戸惑い、謝意を示して遠まわしに拒絶したが、老人は、「探しものは、手を分けて行った方がはやいですよ」と、にこやかに、次々と顔見知り声をかけていく人々は、好奇心をそそられたのか、朝食前の時間だというのに、二つ返事で言葉探しを引き受けてくれた。

「しかし、なんですな。文字ではなく、形のない、言葉、自体を入れておける封筒とは、また珍しい物をお持ちですな」

老人がベンチの下を探しながら言った。

「通販で、買ったんです。一袋三百五十円。三枚セットだと、千円になるんです」

男の声は、はじめより明瞭になっていた。

「通販ですか。私の家でも妻がよく利用していますよ。なんですかな、電話一本で、どんな物でも自宅まで届けてくれるから、たいていそう楽なんだとか。そうそう、おまけにいくらかの金額を超えると、送料が無料になるとか言って、よく必要以上の数を買っているようにしてね」

「そうなんです、よね。ぼくも、買い物に出る時間もあまりないし、この辺りの店は地理不案内で、通販ってありがたい、んですよ。どんなものでも売って、ますし。奥様の気持ちも、よく、分かります、ぼく。つい、そういった言葉にひっかかってしまって、

そこまで必要のないものまで、つい、買ってしまったんです。実は、あの封筒も、そういった経緯で、買ってしまつて。あと三百円で送料無料になつて。でも、三百円のために、千円のものなんか追加したくない。素直に送料を払うか、どうしようか迷つていた時に、収納の頁で、あの袋の宣伝文句が目に入つたんです」

《失敗の引き金になる言葉、口にしてはいけない言葉。 口からでる災の 言葉 を、選んで収納！》

——その一言を言つてしまったために、友達と喧嘩をしたり、恋人と別れてしまった苦い思い出はありませんか？

たつた一言。

その一言が、取り返しのつかない結果を作つてしまうことも、人生ではよくあることです。

言葉は生き物です。 管理をしつかりしておかないと、この先また、うっかり口から出てしまうことがあるかもしれせん。

けれどご安心下さい！

この 言葉袋 に、禁句の言葉をしまつておけば、その言葉は永遠に、あなたの口から出ることはありません。

一度この袋にしまえば、封を開くまで、その言葉があなたの口から出る心配は、永遠にないのです——

「 言葉袋 ですか。 つまりは、腹にたまつた愚痴や不満を、その封筒の中に封じ込める、ということですか」

「はあ、まあ、そういうことに、なりますね。 ぼくはもともと、はつきりと、思ったことを口に出来るタイプではないんですが、その、不満を、言つてしまいたいと思うことが、時々あつて。 でも、言つてしまったら最後、たいそう痛い目……その、そう、周りで聞く人達に不快な思いを、させて、その、一度口にしたことがあ

った、んですが、それ以来、そういった言葉を口にしては、いけないと思つて――」

「不満のひとつやふたつ持つことは、普通ですよ。それをしまいこんで、口から出さないようにしようとする、あなたは周囲にずいぶん遠慮をされる、我慢強い方ですな。しかし、ですな。こう言つてはなんだが、その袋は確かに、使えるものだったのですかな？」

男は、老人の顔を始めて正面から見ると、それまでの気弱そうな表情を一変させ、いきいきと話を始めた。

「そう、そう思われるでしょう？　ぼくも、これはマユツバだと思つて、冗談で一枚だけ買ったんです。

届いたその日は、ちょうど土曜で休みだったんで、上手い具合にすぐに受け取れて。早速箱を開けると、他の商品の上に、紫の布袋に入つた封筒と使用説明書が入っていたんです。

それに書いてあるとおり、ぼくは、暦で言霊をしまうのに良い日付を決めると、その日の太陽が昇る前に起きて塩水でうがいをし、東に向かつて正座し、しまつておきたい言葉を、その日一日かけて封筒の口に向かつて言つたんです。

最後の言葉を言い終わると、付属の専用糊で封をして、なんの言葉をしまつたか但し書きも書いて、この外袋に戻して引き出しにしまつたんです。

この外袋には、言葉を鎮める呪いがしてあるとかで、言葉を眠らせておく作用があるんだそうです。この袋に入れないと、言葉が封筒を支配して、外に逃げようとするんです。言葉というものは元来、外に出たがるものらしくて、きちんと保管しないといけないと、説明書には書いてありました。

実際、言葉をしまつた後からは、封筒が意思を持った生き物みた

いに、暴れ出したんです。説明書にも、そう書いてありました。しまった言葉の種類によっては、封筒が暴れだしたり、徘徊したりする可能性がありますので、言葉の収納後は、速やかに外袋に入れるようにして下さい。って。

でもですね、あの封筒は本当にすごいんです。しまった言葉は、本当に口から出なくなってしまうんです。以前なら思わず口に出してしまいそうな状況になっても、形にならないまま、すうっと消えていくんです。霧が散らされるみたいに、決して、ぼくの中では言葉にならないんです」

「それはすごい封筒だね」

老人に声をかけられ、一緒になって探してくれていた酒屋のかみさんが、首に巻いたタオルで、にじんだ汗を拭きながら二人の会話に加わってきた。

「あたしもひとつ買いたいものだよ。いやさね、うちのダンナがさ、酒飲みのろくでなしでね、酒漬けの狸みたいに毎晩まいばん、居間に転がってるからさ、あたしや毎晩『このロクデナシの役立たず』って怒鳴り散らしてんだけどね」

かみさんは、ベンチにどかりと腰を下ろすと、老人と男にも座るようにと、腕を引っ張った。

「頭にきたそん時は、怒鳴ってすっきりしてるんだけどね、後でこう、あんなこと言わなきゃよかったって、もやもやしてさ。

あたしが怒鳴ると、ダンナも怒鳴って大喧嘩になるし、子ども達は呆れて寄り付きもしなくなるしさ。

娘には『母さんがあんまり父さんを罵るから、父さんは余計に酒を飲むんだ』なんて言われてさ。あんななんかにやわかんないよ

って、思うんだけどさ、一理はあるかって思うことがあってさ。
その、なんだい 言霊袋 ってやつに、その言葉を入れてしまっ
ておいたら、口から出なくなるんだろ？ 口から出なくなりゃ、少
しはダンナとの喧嘩も減るんじゃないかって思ってた。 ね、あ
んた、そう思うだろ？」

男は、かみさんの同意を求める言葉に、どう答えてよいか分から
ず、腰を浮かせ気味に、視線を右下左と彷徨わせ、「はあ、まあ、
その——」と、曖昧な言葉をなんとか口にした。

「おまえさんとこの夫婦は、どっちも口がたつからな。 だいたい、
言い合うことが、互いのストレス発散手段になってるんじゃないの
かね？ 言い合うことを止めたら、他のところでストレスがたまる
んじゃないのかね？」

犬を抱えた老人が、苦笑の混じった、やんわりとした言葉で、か
みさんの勢いを受け止めた。

「まあ、確かにそうなんだけど、試してみないとわかんないからね。
で、その袋つてのは、どこの店で売ってるんだい？」

かみさんが、男に急かすように問うと、男は曖昧で卑屈な笑いを
浮かべた後、うつむき、謝るように言った。

「その通販の店、いまはもうないんです。 潰れたみたいで。 で
も——」

「でも、なんだい？」

「この方の、言われるとおり、ですよ……」

男は胃の辺りを摩りながら、他では見たことがない、その店オリジナルの商品だったと、付け加えて言った。

「おやま、そりや仕方がないね。しかしさ、それならその袋はよけい貴重なモノじゃないか。おまけに、明日入用なんだろう？早く探しださないと、もっと遠くに逃げちまうかもしれないよ」

周里から賛同する声がたくさん聞こえてきた。男が顔を上げてみると、いつの間にか二十人以上の人々が、一緒になって逃げた言葉探しをしてくれていたのだ。

人々は、口々に、口笛を吹いたり、ちゅちゅと舌を鳴らして、封筒を呼んだりしていた。

男は、目頭が熱くなるのを感じた。

毎日上司に怒鳴られ罵られ、同僚に無視され舌打をされ、後輩に影で笑われている、という噂を、社員食堂で聞いたりする自分に、こんなに協力してくれる人たちがいる。

じんわりとした、温かな思いが、胸の奥底で生まれるのを感じた。

「いた、いたよっ。ここに隠れてるっ」

まだ声変わりもしない男の子の声が、公園西口近くであがった。

最初に声をかけてくれた老人が、男の肩をぽんと叩き、「よかったですな」と笑いかけると、男に急いで行くよう促した。

男の後に続き、言葉搜索に参加した人々が、一斉に子どもが指さしている、西のジメジメしたトイレ裏の茂みに集った。

男の言ったとおり、それは黒い封筒だった。

器用に、四隅を手足のように使い、下二隅で立ち、上二隅で、追いつめられたトイレの外壁に寄りすがっていた。

「間違いない。　これです。　この封筒です！」

男は嬉々とした声を上げた。

周囲からも拍手と歓声が上がった。　皆でひとつのことを全うした達成感が、その場に漂っていた。

「さ、はやく捕まえなよ。　そうしないと、終わんないよ」

酒屋のかみさんが、男の肩を力いっぱい叩き言った。　他の人々も、そうだそうだと励ますように言い連ねた。

男は、じりじりと封筒に近寄ると、しばらく睨みあった末に、さっと封筒に飛びかかった。　しかし、封筒はするりと男の手を逃れ、と、下二隅をフル回転させ、人々の足下をすり抜け、道へと逃げ走った。

薄っぺらで柔軟な封筒は、取り押さえようとする人々の手から、器用にするすると逃げまわる。　時には上二隅を動かし、追いかける人々を、からかうような仕草さえとった。

黒い封筒に翻弄され、人々が汗をかき始めた時。　突然、多量の水が横手から勢いよく放たれた。

「あー。　ごめんなさい。　封筒だけにかけようと思ったのに……」

水道の蛇口につけられたホースから、じょぼじょぼと水を出している子どもの姿が、人々の目に入った。

男は、呆然とした。

足下には、水に濡れ重くなった封筒が、虫の息で、横たわるように落ちていた。

地面にできた浅い水たまりの水を吸って、封筒は更に膨らみ、大

きくなつていくように見える。

その上に、一筋の太陽の光がずっと射した。

「ほら、やっぱり！ 水をかけたら、封筒動かなくなったよ。紙は水につけるとふにやふにやになって、ボロボロになるもんね」

子どもは得意げに走りよつてくると、男の足下にある封筒を拾い上げた。

笑顔いっぱい男を仰ぎ見ると、はい、と男の手に封筒を渡した。

水気を吸った封筒の封が、はらりと開いた。

しまいこまれていた言葉が、堰を切ったように封筒の中から溢れ出た。

封筒の色のままに、どす黒い言葉の、大洪水だった。

黒い封筒の隅には、白のペンで小さく
『罵詈雑言五十選』と、書かれていた。

それからの男。

つかの間築かれたかに見えた、近所の人々との関係は、ただ気まぐずく、奇異な視線を向けられるだけの間柄となった。

そうして、

男はますます通販生活にのめりこんで入った。外出は、会社との往復だけになった。

男は、二度と、通販で不要な買い物はすまい、と心に誓った。

しかし、もし、衝動でまた何かしらを買った場合には、使用説明書を熟読し、その内容を違えてはならないのだと、深く心に刻み付けたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2893h/>

『言霊袋』 —さがしもの—

2011年10月6日00時13分発行